

戦争と「史誌化」：日清戦争をめぐるグローバルな歴史叙述の形成と流通に関する試論（1894-1911）

孫 青（復旦大学）

【発表要旨】

日清戦争（甲午戦争 1894-1895）は、交戦国以外の国々のメディアが従軍し報道した国際的な戦争として、人類の歴史においても早い例であった。日本の軍部の宣伝機構と民間のメディアだけでなく、イギリス、アメリカ、フランス、イタリアなどの西洋諸国のメディアも日本政府から報道の許可を得て、従軍記者を派遣していた。

注目に値するのは、戦地の報道以外に、日清戦争の“戦史”をめぐる歴史叙述は戦争がまだ終わっていないうちにすでに現れていて、しかも著書や文献資料集、評論集といった形で刊行されていたということだ。1895年前後、中国語世界でも、西洋語、日本語世界でもこの類の出版物はすでに少なからず存在していた。その主な情報源が日本政府の監視下に置かれたメディアではあるが、新聞報道とは大きく違い、内容から形式までいずれも“史誌”の形で現れている。

ヘイドン・ホワイトの歴史叙述をめぐる理論からいうと、これらの戦史の共通した特徴は、戦争をより全体的な背景のなかに置いて記述し、“過去”と“未来”との因果関係に従って事件を分類、配列したうえで、批評と予言をする、というところにあった。

日清戦争が終結する前後の短い期間のなかで、様々な言語の“戦史”が一気に現れ、近代のメディアと出版、流通システムを通して世界中に広まっていった。“歴史叙述”として、これらの“戦史”は形式において戦地での報道と著しく異なる特徴を持っている。情報がより総合的であっただけでなく、形式において、全体的な叙述と因果関係、論理的な構造を追い求めていることが、最大な特徴だと言える。

このような戦争に関する人々の見方は、後の歴史的発展に大きな影響を与え、逆に自己認識と歴史認識そのものを作りだすことさえある。従って、改めて戦史を検討し、その具体的な叙述形態や互いの関連性、敗戦をめぐる基本的な感じ方と考え方の相違などを明らかにし、さらに、戦史の形成と流通のプロセスを考察する必要がある。清末の中国で形成された“文明観”と“普遍的な世界秩序”を一種の特殊な歴史的構造に還元すると、120年前の日中間のこの戦争が近代中国の歴史的発展と歴史認識に与えた深遠な影響を、より細やかに理解することができる。

【略歴】